



第 22 号 昭和57年 1 月 15 日
発行者 群馬県山岳連盟
〒371 群馬県前橋市大手町 1-1-1
TEL (0272) 23-1111
群馬県観光課内
編集者 群馬県山岳連盟編集委員会
責任者 川辺柳一
印刷所 コオシン印刷所
定価 1 部 100 円

題字 浜名一雄

団体について



常任理事 水野金太郎

・国民体育大会山岳競技会・
これが国体における、山岳競技会の正式な大会名称です。

国体と登山、我々が、一般人として考えた場合、登山とはどのような競技を行うか疑問が生じると言えます。

本来、登山とは実利的な登山と、非実利的な登山と二つに分ける事が出来ると思われれます。前者は、森林の管理人・鉱山を採る人・山岳地帯を測量する人など、職業的立場で登山する。後者は、信仰・学術・趣味・未知へのチャレンジを目的とする登山などがあります。さらに、未知へのチャレンジの中には海外遠征や未登の岩壁へのアタックなども入ります。

国体における山岳競技は、チャレンジ登山と趣味登山の間に位置し、よりスポーツ競技の要素を取り入れ、基本を重視した、総合的登山技術（氷雪技術を除く）の競争ではないだろうか。

登山競技は、四種別（成年男子・成年女子・少年男子・少年女子）と三種目（縦走競技・登攀競技・踏査競技）で行われます。

「一チーム（三名）で五十キロログラム・六〇キロログラムの荷を背負って縦走し、その中に特別区間を定め、体力を競う（体力）。登攀競技は指定された岩場で登攀と下降中のバランスや確保の仕方、用具の扱い方・スリッパはないか、時間内に競技を終了できたなどの登攀技術を競う（技術）、踏査競技は競技用地図上のコースに定点を見つけて位置と記号を記入したり、コース中の事物・地形・自然等に関する課題に対する回答によって行う競技（知力）と、体力・技術・知力の三力量を、日本山岳協会から認定された審判員により、厳格かつ公平を重点に普遍的・客観的な採点を行いその得点によって順位を決める。

次に、国体山岳競技の流れを説明します。当初国体が始められた時は、山岳部門と呼ばれました。その当時の山岳部門は得点には関係しないオープン競技でした。開催地域の紹介や、全国岳人達の親睦と技術の交流及び登山の普及を目的として行なわれました。第一回秋田国体の頃から、閉会式の中で優秀チームの講評があり、第十九回新潟国体の時には、関係者より講評を行うのなら優秀チームを表彰する様にと、多数の意見があり、翌、第二十回岐阜国体より各コース上位三チームに賞状が出されました。

又、第二十六回和歌山国体には名称を山岳部門から山岳競技へと改めました。日本の経済を揺り動かしたオイルショックで、各自自治体の収支決算も苦しく、昭和元禄時代により経費が膨大となった国体に対して経費の節約が叫ばれるなど、批判が集まり、ケチケチ国体、と言われ、山岳競技などのオープン競技に対して大会の合理化による風当たりが厳しくなりました。

第二十八回千葉国体の国体委員会総会において、得点競技化の決定が議決され、昭和五十二年頃、日本体育協会より山岳競技の正式得点種目として決定されたと通知が入り、それを受けて日本山岳協会も、第三十五回栃木国体を目指として、段階的に得点競技への準備が進められました。第三十二回青森国体には、縦走登山・踏査登山と二つの種目を設け、翌年、第三十三回長野国体において、種目内名称を従来の登山から競技と改め、ここで初めて、成年男女・少年男女の四種別と縦走・登攀（成年のみ）・踏査競技の三種目で、現在における山岳競技の母体が形成されました。

昭和五十五年第三十五回栃木国体、山岳競技史上得点種目として歴史的な第一歩を踏み出した。しかし、最高十九得点に対して、得点競技としての歴史も新しく、他の競技に比べて実力が一定の県に限定されて無く、選手強化のいかんによっては、どの県でも優勝の可能性が強く団体関係者からも注目され、増々競技性が推進されていきます。

一昨年の栃木国体、昨年の滋賀国体と視察して、競技運営と選手強化に著しい変化が見られた。競技運営には、採点記録の收拾と集計にテレファックスと電子計算機の端末機を導入し、県、大会本部と電子計算機の本体に直結し記録発表の正確と速報性に努めていた。審判は以前にも増して、公平重視と客観的採点方法が取り入れられていました。

選手選化には、従来見られていた、選手の消極的参加が、一転して積極的参加に変わり同時に選手のレベルの向上が目を見張るほどに感じられました。

群馬県山岳連盟としても、群馬国体に向けて現況を把握し、今までの認識を改め、加盟団体が、一致団結して県内予選会には、所属会員の中からベストメンバーを出

場させ、競技役員の推せんなど、国体に対する一層の理解と協力を要請しなければと痛感しました。

推せんされた選手も、強化コースより強化スケジュールが提示され、それに基づく強化合宿だけでなく、他の競技と同様に選手一人一人が、自主的にトレーニングに

心掛ける様に、積極的な自己強化が必要ではないかと思えます。しかし私見ですが、山岳競技は登山の一部であり、登山全体をなおざりし、登山者としての本分を忘れて、原点である遠の高い山々への憧憬、行雲流水を友としてなど、自然を求める純粋な心はいっまでも残してほしいものです。

リハーサル大会の大綱出来る

58年あかき国体山岳競技のリハーサル大会は、57年十月十六・十八日の関東高校登山大会として行われるわけですが、大会実施要項・予算概要等が、第38回国体山岳競技会実行委員会連絡協議会幹事会の数回にわたる会合や高体連登山部の意向を加えて、十二月十五日の川場村での会議、その大綱ががめられました。

関東高校登山大会は、山梨を含む一都七県から、予選を経た八校ずつ参加し、一チームが監督を入れて六名編成・計、四チームが参加します（各都県別、男子・女子三チーム）二泊三日、日程ですが、実際の登山行動は中一日です。コースは次の通りです。

A 隊 宝台樹樹・須原尾根・武尊山・武尊牧場
B 隊 桐の木平・前武尊山・武尊山・武尊牧場
C 隊 武尊山・武尊牧場
D 隊 戸倉スキー場・富士見峠・あやめ平・皿伏山・大清水

この大会は、岳連側からは、リハーサル大会であるし、高体連側からは、第26回関東高校登山大会という二重の性格をもっています。大会を成功させるには、運営及び競技の両面にわたっての岳連、高体連の協力が必要で、高体連が密接な連絡を取り合いながら、沢山の協力者を得て実施されなければなりません。行動隊には、登山部から、隊長・副隊長・班長がつかますが、通信・救護・先導・講師なども必要だし、運営役員も総務・会計・広報・記録・宿泊・交通・武典・幕営等々に当る多数の人達の協力を得て、国体成功への大きなステップとしたものであります。（文責 梓田）

びわこ国体レポート

女屋篤志

第三十六回国体（びわこ国体）に審判員として参加し、その中で感じた国体山岳競技はどんな方向に進んでいくのか、今後の競技運営の指針はどんなことかといったことをレポートします。

国体山岳競技の方向

第三十五回国体（栃の国体）から正式種目となった山岳競技は各県で選手強化に力を入れ、びわこ国体では参加選手のレベルが向上していることを感じました。これには、国体山岳競技が全国的に理解されつつあることと競技方法競技内容がある程度充実したことにあると思います。そして国体山岳競技は、競技規則上では見出し得ないが山岳競技選手権大会の方向に進み始めたことがいえます。

それには、びわこ国体審判団が当初は栃の国体で参加選手層がかなり上下の差があることで議論し、各種目の規定時間、制限時間、打ち時間の設定について検討しましたが、その結果成年女子・少年男女の種別についてはあらかじめ規定時間について設定しないでその日のトップチームの時間を規定時間にしましたが、成年男子は四十六チームを三隊に分けて競技を実施することから始めから規定時間を設定しました。規定時間は、縦走競技の特長、踏査競技、登山競技に設け、規定時間内に到着

したチームが時間得点満点（五十点）を獲得するのですが、設定は審判員と競技役員がコースを空身で走ったり登ったり、これを数回試行して平均所要時間を計測して設定します。選手は規定の負荷重量を背負って行うため、規定時間をクリアするチームは相当な訓練と体力が必要を要します。私が担当した朽木村踏査 S1 コースでは、アップダウンのコース十二、八キロを規定時間百三十分を設定しましたが、滋賀県成年男子チームは百十八分台でゴールし、他に規定時間内に入ったチームが五チームあった。この結果から審判団側では、規定時間設定に問題はなかったと判断し、参加選手のレベルアップと評価した次第ですが、規定時間はますますシビアになり参加選手はさらにトレーニングして規定時間クリアに努力すると思われることから、国体山岳競技の将来は、全国の登山技術と体力を持つ岳人が競う大会になると推測します。

国体山岳競技運営の指針

びわこ国体では、競技運営を円滑にするため総合成績にコンピュータを導入しました。これは山岳競技にかかわらず、県が総ての競技得点、順位を算出するためのものですが、山岳競技に関しても各競技種目得点を入力することで

機械的に順位が出されることから人間が計算する時間や誤りなどがなく、成績計算を担当する係員の業務負担も軽減されたことと思います。このため競技成績の発表が速かった。また、各山岳競技会場（実行委員会、現地本部）から実施本部への競技得点報告は電話回線を利用したファクシミリをフル活用して正確な連絡を行っており、これに加えて地方気象台から発表される気象通報を一時間ごとにデーターを電送し、運営面で役立っており、こういった機械化導入は、競技役員業務負担の軽減、役員減にもなることから今後の国体に採用される方向にあると思います。

次に競技方法、内容については規定時間、制限時間を設定し、評価内容を出るだけ事前に公表し、その採点方法も具体的に明記したことです。そして主観的な要素は最少限にし、客観的評価を重点としたことです。この結果の一つは縦走競技の歩行計画時間の申告や審査審査など技術の一部を時間で換算することであり、二つ目は技術が〇×か×か〇といった審査方法で△や□といった中間要素は×にした採点で審査したことであり、まぎらわしさが生じる審査項目を採点対象から除いたことです。

競技運営の方法としては、私が担当した踏査競技 S1 コースでは、監督・選手から何のクレームもなく、好評であったことから一例としていただきます。

一、競技役員、自衛隊支援隊、村役場の係員のチームワークが抜群に良かったこと。この要因は競技開始前夜の酒宴による全員のコミュニケーションができたことと地元副主審判員を中心とした万全な準備体制ができていたことにあると思います。

二、放送や提示によって選手の動きや得点を早く監督に知らせることができたことで監督団を掌握することができ、かつ好評だったこと。これにはスタートとゴール地点が同一の場所であり、コンパクトのコースから最終チームがスタートし、約一時間後にはトップがゴールするため応援に参加してくれた小中学校生徒や村民の人々の待時間が適当であった。方法は、コース上に四箇所の通過チェックポイント（通過チームと時間を通信し、それを場内放送した。さらに第四通過ポイントとゴール間は約五分ぐらいの距離にあり、放送で「間もなく〇〇県チームがゴールします」が流れると声援も高まる）と同時に、チームがじゅずつなぎでゴールする時の複雑な業務も未然に防げた。選手がゴールした五分後には所要時間と時間得点が、十五分後には踏査得点が放送され、これを成績掲示板に記入した。このため監督は他に動けない状態になり、完全に監督団を掌握できた。また、スタート前とゴール後の計量に監督を立会させたため、重量不足の減点もクレームなく納得してもらえた。さらに選手がスタートする時の軽音楽、ゴールするまでの間のソフトな曲目といった音楽効果や、美人女性アナウンサーのおかげで盛り上がり上がった。

第36回国民体育大会報告

成年男子監督 松島宗一

期日 十月十三日～十八日
会場 滋賀県比良山系
テーマ びわこ国体
群馬県選手団

〇成年男子 監督 松嶋宗一（前橋）
選手 佐藤光由（ミヤマ）前川典明（独峰） 森田雅博（桐生）
〇成年女子 監督 茂木稔（独峰）
選手 森下緑 木村文江（以上桐生）
遠峰富子（前橋）
〇少年男子 監督 相沢好雄（伊工）
選手 竹内明（高工） 小暮茂樹 中島好勝（以上伊工）

山岳競技会場の比良山系は、琵琶湖国定公園内にあって、すべて滋賀県に属する Y 字形をなした約二十四 km におよぶ標高千 m 級の連峰である。山麓には国鉄湖西線が走り、国道が山城をとりまいていて、交通の便が良く、山頂や稜線からは琵琶湖が一望できる。

成績結果
〇天皇杯（男女総合）得点
①滋賀 19 点 ②広島 10 点 ③長野 9 点
〇皇后杯（女子総合）得点
①滋賀 19 点 ②長野 10 点 ③岩手 9 点 ④群馬 2.5 点
〇種別総合成績
成年男子 ①滋賀 ②大阪 ③兵庫 ④群馬
成年女子 ①滋賀 ②広島 ③大阪 ④群馬
少年男子 ①滋賀 ②広島 ③岩手 ④群馬
少年女子 ①滋賀 ②長野 ③福岡

以上がびわこ国体で体験した競技運営の方法ですが、運動会や他の競技会と同じ方法であり、今までの山岳競技がこういった方向で実施されなかっただけであり、踏査競技は今回の方向で展開すると思われるし、登山競技、縦走競技も研究され実施されると思います。

最後に、国体山岳競技はまだ日の浅いことで一般に理解されない面が多分にあることから一般の人に見てもらえる競技にすること。参加する監督、選手の不平等、不満が出ない競技運営をすることが今後の国体山岳競技の課題とすることです。あかき国体を目前とした群馬県連として、国体山岳競技発展のために課せられた任務であると思います。

島

〇種目成績
縦走競技 成は成年・少は少年
成・男①滋賀②長野③大阪④群馬
成・女①滋賀②大阪③広島④群馬
少・男①滋賀②広島③岩手④群馬
少・女①滋賀②福島③長野

踏査競技
成・男①滋賀②富山③大分④群馬
成・女①滋賀②大阪③広島④群馬
少・男①滋賀②和歌山③長野④群馬
少・女①滋賀②長野③栃木

登山競技
成・男①兵庫②栃木③滋賀④群馬
成・女①滋賀②広島③東京④群馬
国体山岳競技は、前回の栃国体から正式種目となり、今日の滋賀国体が 2 回目である。まだ競技内容が一定化されていないが、徐々に歩行技術、生活技術など細かい審査が除かれ、時間点のウエイトが大きくなり競技性が高まりつつある。今回の反省点として、岳連全体が国体に対し前向きな考え方であり、選手の実質（基礎体力＋実戦経験）はもろくの人であるが強化においても、スピードを付ける事に力点を置き、的確に弱点を把握し、自主トレーニングにより強化を計るとともに国体競技用のテクニックを知り、徹底的な細部にわたる検討（ザイルの巻取りにおける時間短縮など）が必要だ。又、天皇杯、皇后杯得点を得るには、成年男子、女子、少年男子、女子の種別のフル出場が必要である。

冬山に想う

原田 惣司

秋の尾瀬を三日間、のんびりと歩く機会に恵まれました。

ウィークデーであったためか人影もまばらで、燃える様な草紅葉とぬける様な青空、心地良い冷気はまさに「山は静かにして性をやしない、水は流れて情をなくさむ」の境地にさそってくれました。

その時、ふと感じたことは「自然とは、こんなに華麗でやさしくか弱いものだったのだろうか」と云う疑問でした。大勢の人々に愛され、守り継がれ、保護されている尾瀬の自然がなにか特別なものに感じられたのでした。

この様な尾瀬も季節が変り一雪降れば、様相も一変してしまうでしょう。おとずれる人もなく、狂り狂う風雪は尾瀬を千古の姿に戻してくれるでしょう。

人間が神とまであがめた大自然の力強さ、偉大さは、今や冬山にしか存在しないのではないだろうか、などと思ったりしてみました。

冬山、それは自然が、最もエネルギーを発散し、動き、変化する時期ではないのでしょうか。

一刻もたゆまず、只規則に、変りつづける雪質、雪量は、時には歩行を困難とし、時には滑落の危険を与えます。傾斜面に溜る雪のストレスと粘着度の微妙なバランスは崩雪の恐怖を伝えて来ます。

大巾で急速な温度変化は、発汗した肌から容赦なく体温を奪い取り生命の存続さえも、おびやか

気まぐれな風は、体力とバランスを奪って、人を谷につき落そうとします。わずかな好天と荒狂う悪天の毎日の中で人々は、自然の持つ力の大きさを感じ、その尊厳にひれふしながら、生存出来る小さな場所と目的を達成するための、かすかなチャンスが与えられる様折るのです。

この様な冬山の厳しさが、山男の心を強くとなえ、このために多くの努力と、その成果が積み重ねられて来ました。

しかし冬山にはベテランはありません、個々の技術はマスタリーしても、冬山の持つ大きな変化の中に全て通用する技術は少ないからです。人間の経験や常識をこえて危険もひそんでいます。何年ぶりの豪雪、何十年ぶりの崩雪、記録的な寒波等がその例ではないでしょうか。

冬山を自ぎす者は常に初心にかえり、出来るだけ、山の状況を見きわめて、変化に対応した行動を取る心がけることが肝要ではないでしょうか。

冷厳な冬山に生きるために、すばらしい冬山とつき合うために

に

に

に

第三回岩登り大会

10月4日、58国体の登攀会場となる川場村赤沢南壁で、第三回岩登り競技会が開催された。登攀ルートも新たに中央部に開拓され、

登攀形式も昨年と違い、下部はリード方式を採用した。これは、実際の岩登りと同じで、しかもトップで登攀するもので、技術と精神的な面でタイムレースである。上部は5級以上のグレードとなり垂直を超える部分もあるので、トップロープ方式をとり、合計タイムで競われた。参加選手は13名で成績は次のとおりである。

一位 鈴木 繁 8分14秒
二位 新井尚夫 9分38秒
三位 新井利之 9分44秒

なお、10月24日・25日に行なわれた日山協第五回岩登り大会では、新井利之・藤岡(が)四位となった。

武蔵山清掃登山報告

58国体山岳山岳競技会指定の山の清掃登山を、五六年十一月一日晴天に恵まれ、岳連各会及び地元の方々、また岳連事務局の協力により、水上地区・川場地区・片品地区の三班に分れ、参加者全員が一体となり、ゴミ・空き缶等を袋につめ込んで持ち帰り、無事に目的を終了しました。

この清掃登山の目的である登山者の自然を尊重しと58国体に向けて地元と岳連が一致団結という意味において、充分目的を達せられたと思います。参加していただいた人達には、大変御苦勞様でした。

記録

清掃分担及び参加者
一班 青木沢・須原尾根・沖武
二班 沼田山岳会・中之条
三班 山岳会・吾妻山岳会・前

橋山岳会 計35名。

二班 川場自然休養林・前武蔵
高崎、藤岡、安中、各会
計10名。

三班 武蔵牧場・沖武蔵
片品山岳会13名、桐生山
岳会5名、大間々山岳会
4名、太田山岳会4名、
群馬、星稜山岳会5名、
伊勢崎山岳会1名、境町
山の会4名、事務局2名、
その他5名計46名。

各班合計91名の参加
コースタイム(三班)
七時十五分出発 沖武蔵着十時
四十七分着 武蔵牧場十三時五
十分着
武蔵牧場全員集合後、地元片品
村村長さん他が見え、あいさつを
いただき、石井理事長のあいさつ



位 相沢好雄(伊工高)第三位
高橋一栄(中之条)第四位 剣持
英司(中之条)
少年・団体及び女子個人
第一位 伊工(藤川哲生・高橋武行)
第二位 勢多(高橋一芳・小林元雄)
第三位 伊工(阿久津進一・須永正文)

第六回海外登山技術研究会

たぐさんのヒマラヤ経験者をかかえ、着実に高い実践成果を得ながらこの研究会も六回を数えることになった。日本ヒマラヤ協会とは昨年に続く共催である。本岳連会員を中心に、県内外から約六〇名の参加者を得、ますますの参加者を得て盛況であった。

第一日は稲田定重氏の「最近の高所登山の傾向と戦術」という題で、アルパインスタイルや短期速攻登山についての話。次に春のカンチエンジュンガの報告を八木原がスライドと8ミリ映画を使って行った。夜は例によって一番楽しみな(一)懇親会を盛大に。

第二日は群馬県山岳隊で終始始の先端をリードし続けてランタナ・リルの頂上立った阿部源登攀。次に前橋山岳会のラルゴロヒ三峰登山の報告を小泉俊夫隊長に任じた。

最後が今回の主題「今後のヒマラヤにおける冬期バリエーションルート登攀の可能性について」の討論は、予定した八〇〇mのパネリスト二隊の不参加で、やむを得ずトーンダウンをした。

しかし北大の石村明也氏及び「山と仲間」編集スタッフの近藤和美氏による基調報告は大変貴重なものであった。二年後に冬期エベレスト登山を目指すカモシカ同人隊員の熱心な質問が目まぐるしく

国体中央来県指導される

期日 十一月二十五日
場所 片品村役場会議室
講師 宮田甚兵衛(滋賀県志賀町役場国体局長)・国松嘉伸(滋賀県山岳連盟理事長)

第三六回国体(びわこ国体)山岳競技を成功させた立役者である両氏を講師に招き、長期にわたった準備過程の問題や、苦勞談を通して、「あかぎ国体」開催準備に貴重な御指導がありました。

国体山岳競技は、会場が広く自然の山で実施されるため、わかりにくい競技である。それゆえ準備が大変である。準備には、受け入れ、組織作りを強力に推進させなければならぬ、最後に国体をやった良かったということの集約として「優勝」することである。

大会運営がスムーズに行えても優勝しなくては何かを得るものはない。また、国体をやった何を得るかということは、県外から参加する監督・選手に、「群馬国体は良かった」と評価されることであり、岳連・地元の歓迎体制が大事である。「本当に国体をやった良かった」という心の中に残るものがあれば意義あるものだと思います。

以上が講義の要諦であった。御多忙の中、群馬まで向かいに来ていた講師の先生方に厚くお礼申し上げます。